

基礎力の定着を目指して



昭和女子大学 金子朝子

どの言語を学ぶにも、その基礎は語彙力と文法力にある。例えば、water という語を知っていれば、コップを持って何か探している人に “Water?(ノ)” と水が欲しいのかを聞いたり、水の入ったボトルを持ってきて “Water.(ㇿ)” と言って水を注いだりなど、何とか意思が伝えられる。しかしこれには限界がある。より詳細な意味を伝えるためには、いくつかの語彙を英語のルールに従って並べる文法力が必要だ。様々な分野で英語力を付けるための指導が研究されている。だが、その成果もそのまま日本の授業に当てはめることは難しい。

実際の高校生の英語語彙力や文法力の現状はどうか、そして、それらの力をより確実にするための知識と使用のバランスをどう取れば良いのかを考えてみたい。最後に、より確実な力を付けるために『VISTA』の編集で工夫した点をご紹介します。

(1) 英語の基礎力

コミュニケーションのチャンネルは、声の大きさからジェスチャーに至るまで、いくつもある。しかし、言語そのものが最も中心的なコミュニケーションの道具であることに間違いはない。

小学校英語活動、中学校・高等学校学習指導要領(外国語)の目標には、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することによって、小学校では「コミュニケーションの素地」を、中学校では「コミュニケーションの基礎」を、高等学校で

は「コミュニケーション能力」を「養う」と記されている。これを基準とすれば、中学校学習指導要領が示している言語材料を身に付けていることが、英語の基礎力と考えられよう。語彙は1,200語が、文法事項は①文の仕組み、②さまざまな文構造、③進行形も含めた動詞の時制、④受け身、⑤to不定詞、動名詞、分詞などの準動詞、⑥代名詞、形容詞・副詞、などが言語材料としてあげられている。

(2) 基礎力の現状

生徒の語彙力の現状はどの程度か。表1は、2007年度版の中学校7社、高等学校5社の英語教科書で使用された語彙と、中学3年生を対象に2011年度に実施された全国学力テスト「特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)」の作文解答の一部、大学生のエッセイを集めた「ICLE日本人サブコーパス」の語彙使用の特徴を比較したものである。

語彙の標準タイプトークン比(総語数に対する異なり語数の標準化された比率。語彙の豊かさの指標)と一文の平均語数の推移を見ると、いずれも高学年になるに従って伸びている。一方、中学3年生の作文と大学生の作文では、教科書のペースに追いついていないとは言えない。調査やICLEは産出語彙数を示している上にトピックが指定されていたため、語彙の豊かさの点ではかなりハンディがあるが、この点を考慮しても大学生でやっと中学2年の教科書に届く程度である。理解はできても使用できるまでには定着していないことを表している。

表1. 学習語彙と使用語彙の比較

	教科書					調査	
	中学1年	中学2年	中学3年	高校I	高校II	調査(中3)	ICLE(大学生)
標準タイプトークン比	31.49	37.26	39.70	40.29	40.63	26.37	35.30
一文の平均語数	4.01	6.00	7.57	12.48	13.91	6.02	12.77

それでは高校生の文法力はどうだろう。大学生のデータから作文の誤りを見ると、表2の通りである。表中の「語彙と文法の関連」の誤りは、It is natural, necessary, surprising 等が続く that 節に、話し手の主観的、感情的判断を示す should を使用していない等がその例で、このカテゴリーを除いても文法の誤りがすべての誤りの半分近くを占めている。しかも動詞は時制、名詞は数の誤りが中心で、文法ルール自体はほとんどが中学校で学んだはずの事項であった。学んだ時点で理解されていたとすれば、これも定着していない証拠となる。

(3) 砂上の楼閣にならないために

もともと言語の習得には、気が遠くなるほどの時間が必要だ。教室外で、学習している言語に日常的に触れることができる環境にいても、どの言語であっても、初級を抜け出す(日本の中学終了程度)までに、少なくとも1,000時間以上が必要(Brown & Larson-Hall, 2012)とされる。教室外ではほとんど英語に触れない日本の環境で、中学校では、週4時間×年35週×3年で420時間(実際は50分授業なので350時間)の授業しかない。そのハンディの中で、語彙や文法の定着を図ることが求められている。英語の学習では、例えば、3人称単数の主語の場合には動詞に-sを付けることを習得しても、助動詞を学ぶと知識の組み換えが必要となる。そこで、たとえ学んだことの80%を身に付ける力を持つ優秀な生徒がいて、1年生で学んだ100の内の80を身に付けても、2年では(80+100)の80%の144、3年では(144+100)の80%の195しか定着しない計算になる。基礎の部分で分母を増やすことの重要性が納得できる。しっかりと土台作りのために、まずは基本の語彙と文法を理解し、次に英語を使って情報、気持、考えなどを伝え合い、的確に伝わらない原因となる誤りを修正することを繰り返して、理解したことを定着させることが何より重要だ。

文法を確実に身に付けるために、高校1年の初めに中学の教科書の2、3年を暗記し、中学の学習を振り返ってはどうかだろう。特に、文法能力は段階を追って発達するので、中学までの文法が定着していない

表2. ICLE日本人サブコーパスに見られる誤り

分類	割合	分類	割合
語彙 24.43%	綴り	文法 48.89%	冠詞
	語彙の選択		名詞
	品詞		代名詞
使用域	0.78%	形容詞	0.40%
表現	10.39%	副詞	0.73%
語彙と文法の関連	8.17%	動詞	10.50%
句読点	7.32%	語順(含脱落、余剰)	8.29%

と高校での学習が砂上の楼閣になる。文法の誤りのトップである冠詞も自然に身に付く。正確に暗記できたら、書いたり口頭発表をしたりするのも良い。一方、語彙学習には決まった発達段階はない。例えば、名詞のantよりもhippopotamusの方が、綴りが長くて難しいかということそうでもない。興味や必要性があれば、hippopotamusを先に学ぶ子供も多い。いずれにせよ、私たち人間は、意味のないものは覚えてもすぐに忘れてしまうものなので、新しい単語を覚えたら、ぜひ、その語彙が使われている英文例も覚えておきたい。私の高校時代の恩師は毎時間、It's good for the health to get up early in the morning.の文を全員が一人一人正確に言えてから授業を始めた。この1文を正確に暗記したことで、ここで用いられている語彙や文法は絶対に忘れない。名詞に比べると、動詞は文中の他の要因によって使用する語彙やその形が決まることを考えると、なおさら、中学の教科書の利用はお勧めである。

コンピュータもそうであるように、頭の中にデータがほとんどない状態では、英語を理解したり使ったりすることは絶対にできない。その上残念なことに、人間はコンピュータと違い、一度覚えてもそのままでは必ずいつかは忘れる。全く忘れてしまっただけならまたゼロからスタートするよりは、忘れてしまう前に思い出す工夫、つまり繰り返しが大切だ。

(4) 宣言的知識と手続き的知識

英語を習得するには、英語の仕組みについての知識である「宣言的知識」とそれを使って実際にどうコミュニケーションを行うかについての知識である「手続き的知識」の2つが必要だと考えられている。一般的には前者を「知識」、後者を「使用」と呼ぶが、どのように使用するかも知識の一つという考え方で

表3. 指導のプロセス

中学校			高等学校		
1年	2年	3年	1年	2年	3年
A 手続き的知識		宣言的知識	D 手続き的知識		宣言的知識
B 宣言的知識		手続き的知識	E 宣言的知識		手続き的知識
C 宣言的知識		手続き的知識	F 宣言的知識		手続き的知識

ある。一方だけでは習得には不十分だ。英語を外国語として学習する日本において、短期間に目標の英語力に達するためには、宣言的知識は重要だ。宣言的知識は単に教師が文法説明をすることばかりではなく、その知識に基づいて英語を使用した時の誤りを、教師や他の生徒から修正してもらうことでも身に付く。こうした修正は、生徒に文法的な気づきをもたらす絶好の機会となっている。

さて、木箱を作ろうとしても、板の大きさが不揃いでカナヅチも柄が抜けそうなものしかないと、釘を打つことすらできないように、中学までの基礎的な英語力がなければ、宣言的知識の積み上げも手続き的知識の積み上げもできない。となると、中学校でどの程度の語彙力と文法力が身についているかで、高校での指導プロセスを変えざるを得ない。現時点では、小学校では英語に「慣れ親しむ」枠組みとなっており、それに続く中・高が英語指導の重点をどこに置くかを考えることになる。表3には、中学校、高等学校で宣言的知識と手続き的知識のバランスをどう取るかについて、いくつかのプロセスの可能性を示した。どのプロセスをとっても、中学3年終了時には両方の知識を等分に備えていることを前提にしてある。B + Eが理想的にも思えるが、両方を常に並行して行うことはどちらも不十分なままになりそうだ。小学校英語の今後の動向によってはA + Dも可能となるかもしれないが、現状では難しい。基礎力を十分付けようとするればCで始め、大学入試を目指さない場合は、Fを取ることも可能だ。トータルに見て、宣言的知識だけでも、手続き的知識だけでも、コミュニケーション能力を身に付けることは難しい。もし、その2つの知識の基礎となる文法力の定着が不十分ならば、高校でもより多くの時間を宣言的知識の補充にかけなければならない。

宣言的知識と手続き的知識の配分は、それぞれの高校の英語学習と指導に関する様々な条件を考慮して決めて行かざるを得ないだろう。

(5) 『VISTA English Communication I・II』の工夫

従来から『VISTA』は「言葉の教育」「国際理解教育」「人間教育」という大きな柱に加えて、基礎力の定着を念頭に編集している。これは、将来、社会に出て、そこで必要となる英語力を積み重ねるための土台となる力である。

『VISTA I』ではLesson 1～3で中学校の総合的な復習を行っている。中学2、3年の教科書の代わりに、この3課を暗記用に利用していただくこともできる。『VISTA I・II』を通して、本文はできるだけ使用頻度の高い基礎的な語彙を用いてシンプルな英文で易しくまとめ、練習問題は、既習内容を違ったシチュエーションで繰り返せるように工夫した。前課で学んだ新出の文法事項を含む文を、次の課の本文に出すことで、すっかり忘れてしまう前にもう一度違った文脈の中で触れることが自然にできるように配慮した。

また、宣言的知識、手続的知識の両方を定着させるために、学んだ語彙や文法事項を様々なコンテキストの中で4技能を統合的に使って行う学習も多く取り入れている。読解力を養うためには、各レッスンのセクションごとにReading Pointを明記し、本文の後のThink!では、英文のサマリーを書く前にその内容を深く理解するため、生徒はまずPISA型の設問に答える。それを基に本文の英文サマリーを完成する構成としている。『VISTA II』の巻末の「活用例文集」も、文法を解説したStudy It!の例文の補足として、英文の仕組みを確認するために大いに活用していただけることを期待している。

〈参考文献〉 S. Brown & J. Larson-Hall (2012). *Second Language Acquisition Myth*. University of Michigan.